

第7期第2回（令和7年度第2回） 横浜市子ども・子育て会議 青少年部会 会議録	
日 時	令和7年10月30日（木）13時00分から午後14時00分まで
開催場所	青少年交流・活動支援スペース 第一研修室
出席者	津富部会長、島田委員、辺見委員、三輪委員、矢尾委員、梁田委員、横田委員、横山委員
欠席者	萩原副部会長、高杉委員、平森委員
開催形態	公開（傍聴者1人）
議 題	「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」の点検・評価方法（案）について
決定事項等	議題について、委員に説明を行い、内容について意見交換を行った。
<p><議事1> 「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」の点検・評価方法（案）について 【事務局】 「こども、みんなが主役！よこはまわくわくプラン」の点検・評価方法（案）について （資料3）</p> <p>（津富部会長） 施策については、これまで取り組んできたが、重点テーマについては未実施であったため、今後取り組むという理解でよいか。</p> <p>（事務局） 重点テーマは、第3期「わくわくプラン」から新たに設定したものであり、第1期および第2期には含まれていない事項。新設された重点テーマについても、基本施策と同様に点検・評価を行う方針である。</p> <p>（津富部会長） 「<方向性の進捗>」欄に「取組」を記載するとのことだが、この「取組」には事業や施策が含まれるのか。具体例があると理解しやすい。</p> <p>（事務局） 「<これまでの主な取組>」「<今後の取組>」には、例えば令和7年度に実施した事業の内容や、それによって得られた効果、課題等を記載することを想定している。「今後の取組」についても、これまでの成果や課題を踏まえ、継続的に取り組む事項や新たに予定されている事業等を記載する予定である。</p> <p>（津富部会長） 事業や施策の点検・評価は従来通り実施されるという理解でよいか。それらが重点テーマの評価において参照されるという位置づけでよいか。</p> <p>（事務局） そのとおりである。配付資料のA3判1枚目（ページ3）を参照されたい。これは第2期計画における基本施策の枠組みと、それに関連する「指標の進捗」「これまでの主な取組」「今後の取組の方向性」を示したものである。これに基づき、個別事業の点検・評価を行っている。重点テーマについても、同様の形式で点検・評価を行う予定である。</p> <p>（津富部会長） 基本施策と重点テーマは異なるものか。</p>	

(事務局)

異なるものであり、両方とも点検・評価の対象となる。

(津富部会長)

「取組」欄には、より具体的な事業や施策との対応関係が記載されるという理解でよいか。

(事務局)

そのとおりである。概要版「わくわくプラン」の4ページには、基本施策1から9までが並び、その上に重点テーマⅠ・Ⅱが配置されている。第2期までは重点テーマはなく、基本施策のみであった。5～6ページには重点テーマⅠ・Ⅱに対応する「アウトカム指標」が記載されており、これらに基づいて点検・評価を行う。7ページ以降には基本施策ごとのアウトカム指標が記載されており、従来通り評価を行う。つまり、従来の基本施策に加え、新たに設定した重点テーマについても同様に評価を行うというのが今回の趣旨である。

(津富部会長)

従来は基本施策の下に事業が並ぶ入れ子構造であったが、重点テーマは横断的なものという解釈でよいか。

(事務局)

横断的な性質を持つものである。

(津富部会長)

具体的にどの事業が重点テーマの達成に寄与するかは、どこかで可視化されているか。

(事務局)

概要版の5～6ページに、重点テーマⅠ・Ⅱに関連する主な事業・取組を記載している。また、アウトカム指標についても併せて説明している。

(津富部会長)

次に「有効性」の評価について、評価基準①②③が示されていた。これら全てを満たす必要があるのか、一部でもよいのか、評価者が迷わないような指針が必要ではないか。

(事務局)

ご指摘のとおり、評価基準の明確化は重要である。今回の評価では、アウトカムベースで「有効性」を判断することを基本とし、まずは課題解決への貢献度(②)を重視している。ただし、課題解決には時間を要する場合もあるため、プロセスや質の評価も必要と考え、「行動変容」(①)や「満足度・納得度」(③)も評価項目に加えた。すべてを網羅する必要はなく、例えば②のみで十分な場合はそれを中心に記載する形となる。逆に、課題解決には至っていなくても、行動変容が見られる場合などは①を中心に評価することも可能である。

(津富部会長)

了解した。この考え方が所管課に伝わることで、自己評価がしやすくなると思われる。②が実質的に①に近いという印象も受けた。

最後に、「進捗状況」では遅れている場合に遅延理由の記載が求められている一方、「有効性」では「○」または「不明」の場合に備考欄の記載が求められており、データがあるが成果が出ていない場合の扱いが曖昧である。そのような場合には、理由の記載を求める方が自然ではないか。

(事務局)

従来のSABC評価は基準が不明確であり、事業所管課によって評価のばらつきがあった。今回の

見直しでは、特に「有効性」が高い事業を明示し、部会で意見交換できるようにすることを目的としている。また、「有効性」の判断には客観的なデータを用いることを重視し、根拠に基づいて「○」を付ける方針である。ご指摘いただいた点については、今後の検討課題としたい。

(津富部会長)

「備考」欄の記載に関する意見として受け取っていただきたい。

(事務局)

承知した。

(津富部会長)

以上、理解が進んだと思われるが、委員各位におかれてもご意見をお願いしたい。

(三輪委員)

質問を兼ねて確認させていただきたい。配付のA3判資料は令和6年度の内容と認識しているが、仮にこれを令和7年度に、現在の御指示に基づいて修正する場合、どのような変更になるのかを説明いただいたほうが分かりやすい。配付のA3判1枚目資料の「R6年度進捗状況」の「B」と記載されている箇所は、このまま変更しないという理解でよいか。

(事務局)

変更しないということである。

(三輪委員)

次ページに「B」と記載された、総合判断の詳細が3つ並んでいるが、これはそのような認識で正しいか。

(事務局)

その通りである。

(三輪委員)

4ページ目には、基本施策2の「主な事業・取組」として、2、3、5、6の4つが記載されているが、これらは前ページの「B」と判断された内容の一部という理解でよいか。

(事務局)

それは異なるものである。3ページに記載されている内容は、「青少年関連施設・事業利用者及び体験活動等の延べ参加者数」を指標として設定しており、その目標値に対する進捗が「B」であったという意味である。

(三輪委員)

つまり、別の評価軸ということか。

(事務局)

別々のものである。

(三輪委員)

それでは、4ページに記載されている施策推進の「R6年度進捗状況」欄にある「B」や「A」、および「有効性」の欄については、今後の見直しにより変更される可能性があるという理解でよいか。

(事務局)

ご指摘のとおり。先ほどの説明が不十分で申し訳なかったが、本体資料6ページをご覧いただきたい。上段には令和6年度第2期子ども・子育て支援事業計画における点検・評価方法を記載しており、下段には令和7年度以降に向けた新たな点検・評価方法の案を記載している。

(三輪委員)

理解した。つまり、A3資料の4ページおよび7ページについては、今後の見直し方針に基づき、「有効性」の欄を「○」にするか、空欄にするか、「※」にするか、「備考」欄に記載するかなどの変更を検討しているということか。また、それは所管課が記載するという理解でよいのか。

(事務局)

ご指摘のとおり。また、所管課が記載する理解でよい。

(三輪委員)

それでは、確認を踏まえた意見になるが、先ほど津富部会長からも言及があったように、「○」や「△」などの記号による評価について、現状では「○」か否かという2択の印象を受けるが、それでよいのか。SABC評価と同様に、結局は悩むことになるのではないかと。「有効性」とは何かという判断が必要になると思われる。

また、横浜市の施策である以上、区によって状況が異なり、ある区では進捗していても他の区ではそうでない場合もある。横浜市には18区あり、それぞれ課題が異なるため、重点的に取り組むべき地域がある一方で、他の施策が進まないことも現実として存在する。市全体として本庁が評価することになるが、そうした地域差に関する記載が本資料には見受けられない。これは本資料に限らず、全体的な傾向であると感じており、記載方法について検討の余地があるのではないかと。

(事務局)

1点目については、説明が不十分で申し訳ない。「有効性」の判断にあたっては、基準の明確化が重要であるとともに、客観的なデータに基づく評価を行うことが重要である。これまでアンケートや調査、インタビュー等を実施してきた事業もあるが、今後は全事業において客観的な評価を実施する方針である。

そのうえで、評価が高いと判断される事業には「○」を付ける。客観的なデータがあっても改善の余地があると判断される場合には「○」を付けない。また、客観的な指標が取得できていない事業については「※」を付け、今後のアプローチ方法を検討するという方針である。

2点目については、委員の御指摘は非常に重要であると認識している。各事業所管課と協議のうえ、地域差や課題の記載方法について検討を進めたい。

(事務局)

補足する。「有効性」については、これまで主観的な評価が多く、昨年度は担当者が「S」と評価したが、今年度は別の担当者が「A」と評価するなど、評価のばらつきが見られた。そのため、評価基準を明確化し、例えば「備考」欄に「利用者アンケートで80%以上が肯定的な回答をしたため『○』と評価した」と記載し、部会で説明・議論するという運用を想定している。

逆に、評価が芳しくない場合も「備考」欄にその旨を記載し、委員の意見を踏まえて最終的な評価を確定するという流れである。

地域差についても、「備考」欄には自由に記載できるため、各区の状況や課題についても記載可能である。部会での点検・評価の過程で、委員からの意見を踏まえて、記載内容を検討することも可能である。最終的な評価は我々が一方的に決定するものではなく、部会の皆様の意見を踏まえて確定するものであることをご理解いただきたい。

(三輪委員)

そうであれば、「有効性」という表現は再考の余地があるのではないかと。言葉の印象に引きずられる可能性があり、将来的に委員が交代した際に「有効性とは何か」と再び議論になる可能性がある。よ

り分かりやすい表現への変更を検討すべき。

また、18区の状況について「備考」欄に記載可能であるならば、その旨を所管課に指示すべき。現場の職員が多く努力をされていることに対して評価を行う取組である以上、総括的な記載だけでなく、各区の特徴や取組状況を記載することが重要。他部会も含めて、ぜひご検討いただきたい。

(事務局)

「有効性」という言葉については、検討を重ね、最終的にこの表現に落ち着いているが、今後も検討を続けていきたい。「備考」欄については、地域性に限らず課題等も記載する方針で整理したい。

(矢尾委員)

先ほどの質問にも関連するが、まず確認から入りたい。現在の説明により、アンケート等の客観的なデータに基づいて基本的に評価を行っていくという全体の方針であると理解した。その中で、「有効性」が高いとアンケート結果から判断された事業には「○」が付される。アンケートを実施したものの、「有効性」の評価が高くない事業には印が付かない。また、アンケート等の客観的指標が取得できていない事業には「※」が付されるというイメージでよいか。

(事務局)

その通りである。

(矢尾委員)

この理解を前提とした場合、個人的には「○」が付されている事業は、うまく機能していると判断されるものであり、継続すべきとの意見になると思われる。逆に、「○」が付されていない事業のほうが、何が起きているのかを我々委員は知りたいと考える。そのため、そうした事業についてこそ「備考」欄に説明を記載していただきたい。

特に、「○」も「※」も付されていない事業が存在する場合、それがアンケート等の客観的指標を取得しており、その結果が芳しくなかったために印が付かなかったのか、あるいはそもそも指標が取得されていないのが判然としない。バリエーションが不明瞭である。

繰り返しになるが、アンケートを実施したが評価が低く、「○」も「※」も付されていない事業については、改善点が何であったのかを我々は把握する必要がある。そのためには「備考」欄にその旨を記載していただかないと、審議が困難になると考える。以上の点について御意見をいただきたい。

(事務局)

先ほど津富部会長からも同様の御指摘があり、矢尾委員からも改めて御指摘いただいた点については、我々としても重要な視点であると認識している。

我々としては、資料を提示し、委員の皆様と議論ができるようにしたいと考えている。高く評価した事業についても、提示したデータに対して「本当に高評価と言えるのか」といった議論が可能であることが望ましいと考えていた。

しかしながら、委員御指摘のとおり、改善点をどのように捉えるかという視点のほうの方が重要であるという点はごもっともであり、今後の記載方法について改めて検討させていただきたい。

(矢尾委員)

前回まで実施していた「有効性」の評価では、市民生活の向上が図られたか否かという大きな判断基準があり、それに基づいてSABCの評価がなされていた。

今回の「有効性」評価では、アンケート結果の良否によって「○」が付される仕組みであるが、例えばパーセンテージ等の指標を設定し、一定以上であれば「○」を付するという分け方も可能かもしれない。ただし、三輪委員の御意見にもあったように、「○」か否かという二択だけでは非常に分かりづ

らいと感じている。

以前の指標では、市側が「市民生活の向上が図られた」と判断し、その根拠がアンケート等に基づいていけばS評価となるという仕組みであった。今回の評価方法と従来のSABC評価をうまく融合できなかったのではないかと感じている。どうすればうまく融合できたかは明確ではないが、指標としては、市民生活の向上が図られたか否か、課題解決ができたか否か、その評価に客観的な根拠があるか否かというような分け方が可能ではないかと個人的には考えている。この点について、御見解を伺いたい。

(事務局)

御指摘のとおり、非常に重要な視点であると認識している。SABC評価の見直しにあたり、我々も検討を重ねてきたが、現状としてBやCの評価がほとんど付されていないことが大きな課題であった。

委員御指摘のように、今回の新たな評価方法とSABC評価を組み合わせ、客観的な根拠に基づいて「有効性」が高いと判断される事業にはSを付す、そうでなければAとするという方法も検討した。

しかしながら、SとAの評価基準、特にパーセンテージ等の数値基準を設けることが現実的に難しいという課題があった。もちろん、基準を設定すること自体は可能であるが、根拠が曖昧なまま設定してしまうと、評価に対する議論が生じる可能性がある。

そのため、現時点では「○」の有無による評価とし、その根拠について議論を行うという形を採用している。いただいた御意見については、今後の検討にしっかりと反映させていきたい。

(横山委員)

今回の事業において、「有効性」という言葉を用いて評価を行っているが、特に評価が高いものには「○」を付す一方、それ以外のものについては優劣を明確にせず、「備考」欄に内容を記載するという方針であると理解している。

そのような方針であれば、我々委員は「備考」欄の記載内容を読み取りながら評価を行うことが可能である。しかし、仮に「○」以外に「△」などの記号を用いるようになると、記号に引きずられてしまい、「備考」欄の記載が形式的になる懸念もある。そのため、記号の使用は控えめにし、「備考」欄の記載内容を重視するという方針が望ましいと考える。

記号による明確化には利点もあるが、記号を用いないことにも利点がある。重要なのは、議論が活性化するような記載がなされることであり、率直かつ豊かな記述がなされることが望ましい。

(事務局)

「備考」欄の記載内容は非常に重要であると認識している。今後、事業所管課と連携し、「備考」欄の記載方針について、一定の指針を示すべきか、あるいは個別に趣旨を説明しながら記載の質を高めていくべきかを検討する。

我々としては、委員の皆様との議論が活性化するような記載を目指しており、その目的が果たされるよう、記載方法の改善に努めていきたい。

(津富部会長)

今の議論を伺って感じたのは、「備考」欄をどの段階で記載するかという点である。「備考」欄が重要であるならば、記載が任意であると誤解されるような運用は避けるべきである。

矢尾委員の御指摘にもあったように、「○」が付されない事業についても議論の対象とすべきであり、「備考」欄の記載が必須であるという運用が望ましい。

(事務局)

「備考」欄の記載タイミングおよび必須性については、改めて検討を進めてまいりたい。

(島田委員)

「備考」欄の重要性については、今後の点検・評価において、我々委員がその記載を丁寧に読み込み、議論に参加することが重要であると認識した。

(津富部会長)

評価研究を専門としているが、評価研究では「プログラム理論」と「プロセス理論」の2つに分けて考える。プログラム理論とは、計画どおりに実施されれば効果が出るはずだという仮説に基づく理論であり、今回の評価でいう「有効性」に対応する。一方、プロセス理論は、計画どおりに実施されたかどうかに関する理論であり、「進捗状況」に対応する。

「備考」欄の記載においては、この2つの観点が増在する可能性があるため、議論の際に混乱が生じないよう、記載内容を整理していただけるとありがたい。

閉 会

資料	資料1 横浜市子ども・子育て会議青少年部会 委員名簿 資料2 横浜市子ども・子育て会議青少年部会 事務局名簿 資料3 こども、みんなが主役！よこはまわくわくプランの点検・評価方法について 資料4 横浜市子ども・子育て会議運営要綱 資料5 横浜市子ども・子育て会議条例
特記事項	